

## 駒沢五十年の回想——最終講義——

山内舜雄

今日は、大変風雨の強いところを御参集頂きまして、私の為に、厚く御礼申上ます。

取り立てて定年退職と申しまても感想もないでございま  
すが、型通り最終講義という事で御座います。係の諸先生方  
に、たいへん御世話になりましたことを厚く御礼申上ます。

「駒沢五十年の回想」と申しますと、大袈裟のように聞え  
ますが、私としては、一人の駒沢人が、駒沢の中で歩んだ、  
僅かのことを申上げるに過ぎません。

定年と申しますと歳のことになりますが、只今御紹介を受  
けましたように、私は、大正九年という、中途半端な年に生  
れました。歴史の事典を見ますと、前の年に第一次大戦が終  
つて、米騒動とかがあつて、大正九年は跨ぎまして翌大正十  
年にパリで講和会議がある。大正九年という何の取留めのな  
い年の暮れに、北関東は日光連山の果てるところ、現在は鹿  
沼かまという小さな町の、山里に生れました。

日光には東照宮がありまして、輪王寺は天台宗でございま  
す。洞門の私が、なぜ天台学をやつたか、私の数代まえの祖  
先の者が、輪王寺に仕えた僅かのご縁がありまして、そこの  
人見貞開という人を父が識つており、その紹介状を貰つて、  
後に比叡山にゆくことになります。

大正九年生れですから十二年の関東大震災は知つております。  
母親に背負れて、竹籠に逃げ込んだ、忘れ得ぬ記憶が、  
今も鮮明に残っています。

小学校に入りましたのが昭和二年で、昭和元年という年は  
一週間しかありませんので、昭和は二年から始まるわけで、  
我等は昭和の子ということで、明るい時代が来たように思わ  
れました。想えば、即位された昭和天皇は二十代そこそこで  
若かつたのです。

今も入学式の古ぼけた写真が残つていますが、最前列の子  
が、小さな人形を抱いて写つております。古い方は御承知か

と存じますが、これは大正の末年に在米の日系移民の排斥運動が激しく起りまして、その親善のために送られて來たアメリカ人形でございます。

どうゆうわけか、北関東の山里の小学校にも、カルフォルニア州の名もないタウンから贈られたアメリカ人形が届いていたのです。その人形を最前列の子が抱きまして、写真を撮つたわけでございます。それは嬉しい、長閑か風景であります。したが、この時、ちょっとしたハプニングがございました。

と申しますのは、山里の子供たちは、青い目をしたお人形など、そう、そういう歌を唱いました、見たことはありません。当時は、男女別学ですから、男の子に人形を抱かせようにも皆恥かしがって逃げ廻る、人形を抱く子がないんです。

師範出たての、坂田という若い女の先生が、泣きそうな顔をして追廻すのですが、誰も抱かない。その中に、一緒に写真をとる校長先生が、お出ましになる。とうとう小田垣といふ、名まえの通り一番小さな、女の子のような、おとなしい子を坂田先生はつかまえまして、因果をふくめてお人形を抱かせ、そこに日米の国旗を交互にかざして写真を撮つたわけでございます。

その後は、どうしたことになつたか、私の拙ない話よりも、壺井栄という方が、『二十四の瞳』という作品を書いて

くれました。瀬戸内海の風光明媚な岬の小学校に、あの大石先生が着任されたのが、昭和三年の四月三日、私の小学校の二年の時です。北関東の山里の子供たちも、全く同じような運命を辿るわけでございます。

戦争というものは、いつたい何だつたのだろう。戦い終つて復員してみると級友の大半は帰つて来ませんでした。アメリカ人形を抱いた小田垣という、おとなしい子も、<sup>もと</sup>基兵团の一員としてソロモンで戦死しました。彼の弟と、私の弟とが、これまた同級で、戦死の様子を聞くことができました。やさしい性格なのに、勇敢に戦つて壮烈な戦死だったようです。それにしても、小学校に入った時抱いたアメリカ人形の想い出は、無惨なものになりました。

が、それは十五年後のことと、小学校の六年間は、私の人生で、一番嬉しい永く感じた時期です。昭和のヒトケタは、それは長閑な、のんびりした時代でした。満洲事変や上海事変が始つていましたが、村ではひとりも戦死者がいませんでした。山里で、遊びほうけている中に、昭和八年になり、二〇キロほど離れた県立の中学校に入りました。六〇名の級友の中で、進学したのは私ひとりでした。

大正九年という年は、西暦に直しますと、一九二〇年で、従つて一九四〇年、昭和十五年には満二〇才になります。そこで徴兵検査を受けて、級友たちは翌十六年の正月、入営致

しました。

六〇名の級友のうち、五〇数名が征きました。骨格薄弱とかで残った数名は、送行会に出てきません。結局、大学まで進学して、まだ徴兵猶予の恩典に浴していた私一人が、五〇数人の前で送行の辞をのべ、見送つてやりました。それが最後だつたのです。

当時の中学は五年制で、今の中二年まで通しでやつてしまふわけです。ですから中学一、二年は遊んでおればよい。受験勉強は、三年あたりから、ボチボチやればよい。私は、

野球をやつたり剣道をやつたり遊んでばかりいました。昭和九年に、明石中学と中京商業が甲子園で二十五回戦をやりましたのを、ラジオで聞きました。村では、かなりの地主であつた私の寺には、その頃、まだラジオがなく、近所の米屋さんにお聞きにいったものです。野球といえば、五年生の時、昭和十二年に熊本工業の川上、吉原が甲子園で活躍しました。

巨人軍の川上監督とは、私は、同じ大正九年の生れということがあります。

目ぼしい人が皆死んでしまったのか大正九年は不作の年で、有名人は居りません。そうです、駒沢にお住いの、あのサザエさんの漫画を書いた長谷川町子先生、昨年お亡りになつたようですが、七十二歳。私と同年のはずです。

昭和十三年四月、本学の予科に入りました。予科二年乙

組、そこに生涯の友となる若月正吾先生がいました。クラス主任は岡本素光先生、この岡本先生との出会いが終生続くわけで、それが私の駒沢生活の始めにもなります。翌年道憲寮に入つて見ますと、その寮監が、また岡本先生、こうして岡本先生のお傍に四十年お仕えすることになりました。その頃パーリ語の末永真海先生が急逝され、その後任に水野弘元先生が来られました。水野先生とは予科三年から、これまたずっとお世話になるわけで、私の学位論文の主査までして下さいました。

道憲寮の寮監は、もう一人おりまして、これが小川弘貫先生、その上に寮長の衛藤即応先生が居られ、この衛藤先生の影響で、私は貧しい才能にもかかわらず、学に志すことになりました。こうして道憲寮に入ったおかげで、生涯恩師と呼べる三人の先生にめぐり遭い、今日まで、なんとか学問の途を歩むことができました。衛藤宗学の一端を担つてゐる、といふ自負と責任が、私の学問の全てであり、それ以外の何もの也没有ません。

昭和十五年ごろ、それは『道元禪師研究』の特輯が出て、戦前の道元ズームのピークの時ですが、現在の総長の鏡島元隆先生が、やはり新進の宗学者として、衛藤先生のお傍におきました。それを見て私も、鏡島先生のように京都へ行って勉強したいと、心に決めたわけです。

こうして衛藤宗学は鏡島先生によつて受け継がれ、多くの人材を打出されました。同門の誼みもあつて先生は、私の晩年になつて出しました宗学関係の著書に、いくたびも書評を書かれ、序まで寄せて下さいました。衛藤先生亡き後の、私の学問の指針は、この上もない同門の先達、鏡島先生によつて大過なきを得たのであります。この点、恵まれていたと、しみじみ思うわけでございます。殊に本覚法門の研究

は、鏡島先生によつてその先鞭が着けられておるのであります。私が口伝法門のトンネルの中から、やつと這出して見るとそこには、先生の宗学からの本覚法門の研究成果が待つていてくれたのです。私は、それを踏えて、『御抄』の研究に入ることができ、永年彷徨した教学の分野から、からうじて宗学へ参入することができました。教学から宗学へ移る難しいチャンスを、鏡島先生は見事に捉えて、私を宗学へと導いてくれたのです。同門の先達といふものは、まことに有難いものであり、これといふのも遠くは衛藤先生のおかげであると想い、不束かな『聞書抄』の研究が巻を重ねる度に、豪徳寺の墓前に参つてゐる次第です。先生から見れば、私の著書など不出来の至りでしょが、私としては、これが精一杯のところで、どうしようもありません。

話が、たいぶ後のことになりましたが、そんなわけで道憲寮で、やつと勉強が軌道に乗ってきた矢先、昭和十六年暮れ

の日米開戦を迎えた。学部二年のときです。そして、翌十七年九月に、変則的な半年繰上げ卒業ということになり、十月一日には、もう、郷里の連隊に放り込まれていたのです。兵役に従事することは、當時としては国民の義務として、それ程深い反省や懷疑があつたわけではありません。ごく自然の国民感情で、当たり前のことを、当たり前にする、ような気持で入隊したわけであります。

戦争についての悔恨とか懺悔とかの問題が出てきたのは、ずっと後の、戦後のことです。そもそも戦う相手のアメリカという国を、私たちはよく知りませんでした。お恥しい話ですが、アメリカにハーバードという大学があり、エールという大学があるということを知りませんでした。現在、私の研究室の前に、エールからの研究員が入れ替り来られて、紹介される度毎に、恥しい思いを致します。

私たち戦中世代の者はですね。アメリカに立派な大学のあることを知つていていたような振りをするんですが、本当はみんな戦後覚えたことなのです。これは当時の風潮で、数すくない外国留学の教授たちもヨーロッパが殆んどで、板書する學術語は、たいていドイツ語で、それにフランス語が加わる程度、英語で書く先生はありませんでした。ですからアメリカで仕上った先生は軽く見られ、その単位を取る学生は、ありませんでした。

すべてが、ヨーロッパの方を、それもドイツの学問の方を向いていたのです。学部長の田中良昭先生から先程、ご挨拶がありました。先生が師事された増永靈鳳先生、私どもは予科のとき梵語を教わったのですが、たいへん語学に堪能な方でございました。戦後十四年経つた昭和三十四年にです。千人もいる日本宗教学会の中から、ただ二人しかない海外留学のドル割当てを得られて、ドイツにゆかれました。戦後十四年経つても、増永先生のあたまは、まだドイツの方を向いていたのですね。ハーバードやエールに行かないで、あの北ドイツの、マールブルッヒという小さな大学にゆかれたのです。

そこで講義に穴が開きました。鶴見にいた私を、大森の自宅に呼びまして、これから海外留学に行つてくる、禅宗史要の補講をするように、とのことになりました。どこに行かれるのでですかと訊きますと、ドイツだ、とのこと、私は、思ひ当るフシがありました。それは先生が、授業の時、よくコーエン、ナトルプ、カッシーラのマールブルッヒ学派のことを、話されていたからです。カッシーラの言語哲学のことを、さんざ聞かされました。後年私は、ヨーロッパの大学を視察に行つた時、マールブルッヒという町を、バスで素通り致しました。もうその時は日本人の関心の対象にはなつておらなかつたのです。

ヨーロッパのことなら、それもドイツのことなら、こんな小さな町の大学でも知つていたのに、アメリカにハーバードやエールという大学があるのを、私は知りませんでした。

西欧の大学の視察を行つたのは、昭和四十六年のことで、この時初めて、アメリカ東部のコロンビヤ大学を始め有名な大学を、見て歩きました。視察団の大半を占める各大学の理事さんたちは、私と同じ戦中世代、そこで私は訊きました。コーネル、ブラウン、ダートマス、ジョンホップキンス、こういう立派な大学があるのを戦前知つていましたかと。正直いうと知らなかつた、というのが戦中世代の偽らないところなのです。アメリカという視野が、完全に落ちていたのです。

昭和三十六年に、本学に助教授として復帰したとき、私は、まず最初に大学新聞に、「戦いに斃れ傷つきしわが世代——駒沢現代精神史の流れ——」を書きました。そして翌三十七年に、生き残った人たちの戦争体験をまとめ、『駒沢に竹波打ちて』を出版しました。「わだつみ会」を主宰されたいた、畏友山下肇氏に序文をお願いし、文学部の山県敏夫先生の書評を頂いたことが、なによりの想い出となつております。戦争の後始末に、十七年かかったわけで、それは言いようもない重荷となつて、私に覆いかぶさつておりました。

また、この頃、中外日報に、「限界状況における日本人の宗教意識——戦犯刑死者は宗教をどう考えたか——」を、長

いこと連載いたしました。これもみな、ささやかな私の、戦争体験の後始末にすぎません。これを一冊の本として出したのが、なんと一昨年の平成三年、『限界状況における日本人の生死観』で、死に際まで、戦争に追いかけられる破目になりました。

今日は、話が飛んでしまって申し訳ありません。終戦の翌年、二十一年に復員した私は、兵役のため中断していた曹洞宗研究生を復活して頂き、学業につくことができましたが、戦前の延長をそのままやる気には、どうしてもなれない。そこで宗教社会学をやってから、仏教をやっても遅くはない、

と思い古野清人先生を九州大学に尋ねたました。まだ、ギュギウ詰めの戦後混乱期の列車で、しかし古野先生はお留守で、とても授業どころではなかつた、そういう状況でした。

九州に行つたもう一つの目的は、能本大学に予科で日本史を教わつた圭室諦成先生がいたからです。圭室先生の話を聞きたかつたのです。

四十年の中頃、私が教務をやつていた時、その古野清人先生が、本学の大学院に来られました。私は胆のつぶれるほど驚きました。結局、私には、古野先生の学問をする機会は与えられませんでした。

曹洞宗研究生は復活されたものの、田舎の勉強より東京のひる寝とは、よく言つたもので、郷里で勉強していくても埒が

あきません。

昭和二十三年の宗学大会に出席して見ると、そこに同窓の若月正吾先生が、ソ連抑留から帰られておりました。当時、先生は図書館にて空白期間を充電していました。羨しくなつて翌二十四年、私も郷里から出て来て、ムリを言つて図書館に入れて貰い、若月先生は教務に替りました。そのことが、その後の二人の人生を大きく分けました。「お前は勉強が好きだったから、図書館におれ、おれは教務をやるから」と言つたことばが、今でも耳朶にのこっています。親友というものは有難いものでございます。

今でも憶えております。学内の同じ宿舎から出まして、私は図書館の方へゆく、彼は本館の方へゆきました。「今日は、始めての教務出勤だ。」と言つて去りゆく将校服の後姿が、今でも眼に映ります。当時は着る物がなく、みんな古ぼけた軍服などを着ていました。昭和二十四年四月のことで桜の古木だけが、昔のとおり咲いていました。この二十四年から新制大学となり、商経学部（後の経済学部）が置かれ、若月先生は本学の高度生長を、藤田学監先生と共に歩まれることになりました。先生とは、予科一年乙組からの、長いお付合いでした。私より一足早く定年になりましたが、文字どおり戦後の駒沢を初めから今日まで見届けた人でありました。私も、定年となり余暇ができますので、昔話をゆっくりしたい、そ

のことを愉しみにしております。

新制大学の発足を前にして、二人で話し合った駒沢の未来像は、からずしも今日の駒沢とは、だいぶ違います。しかし、すべては済んだことです。似ているところも、似てないところも、それぞれ理由あつてのこと、生涯を駒沢に埋めつくした二人にとって、悔いはありません。ユーモラスな想い出話を一つ。二人で駒沢に農学部を作つたら、と話し合ったことがあります。今にして思えば、これは隣りのゴルフ場、現在の駒沢公園がイモ畑だったことに基因するようです。飢えている時は、人間こんなことしか考えないものです。その頃のことです。軍役でダメになつた語学を見て貰いに水野先生のお宅をお伺い致しますと、先生みづから作られたイモ粥を御馳走して下さいました。それが涙の出るほど嬉しかったのを憶ております。

それはともあれ、話を元に戻すと、図書館で二年ほど、私も充電致しまして、二十六年の春、再び曹洞宗研究生として京都にゆくことになりました。この時、岡本素光先生は、豪徳寺の衛藤宅へ、私を連れてゆきました。衛藤先生という人は、仏教学から宗学に入られたので、門下生には、まず仏教教学をやることを、厳しく言わされたのです。その第一が鏡島先生で、華嚴教学をやるよう言われたとのことです。第二番目が、私で、こんどは天台ということになります。なんと

いつても華天<sup>けでん</sup>二宗が、仏教学の大宗です。鏡島先生は、同門の大先輩で、大正元年のお生れ、私は八年ちがいます。その間に誰れもおりません。戦争の時、ちょうど二十代だった人たちで、戦死したが、生き残つても学問への復帰ができないほど傷めつけられた不幸な世代です。その中には、当然本学に残つて学問を担う優秀な人たちがいたはずで、私も、その何人かの名まえを今でも憶えています。

鏡島先生は華嚴を直ぐに卒業されて、宗学に入られましたので、寮生としては鎌田茂雄先生が引き続いて華嚴をやられ、とうとうこれを大成されました。また衛藤先生の得意とした唯識教学は、小川弘貫先生が受け継がれ、それを太田久紀先生が引き継がれたわけです。残るは三論教学となりますが、これを小川先生とは御縁の深い、現学長の平井俊栄先生がやられて、この難かしい三論を大成されました。

そんなわけで天台をやることになった私は、叡山に行きましたが、いつも同じ叡山も荒れ果てて専修院は開店休業のありさま、その時、応対してくれたのが教学部長の山田恵諦師、この人のすすめるまま院長の山口光円師の自坊、洛北の曼殊院にころがり込んで、兩三年、法華三大部を受講することになりました。この時、父が頼んで書いて貰つた日光輪王寺の、人見貞開師の紹介状がたいへん役立つたようです。

山田恵諦師は、後に天台座主となり、いまだに健在で、も

う九十を遙かに越えています。話しあは飛びますが、昭和六十三年秋、光円僧正の十七回忌の時、大導師をつとめられ、三十数年まえ私が上山した当時のことを記憶されており、懐しい想いが致しました。

光円僧正は寛容で、えたいの知れない他宗者の私を、自坊におき、授業料はおろか、食費もろくに払わない私に、朝夕、マンツーマンの個人講義をしてくれました。これがなかつたら、現在の私はありません。日本中が、まだ飢えていた頃、よくもこんなことをしてくれたものだと、今にして思います。光円僧正は、学問の伝統を絶やさないために、そうしてくれたのです。

この歳になつて、つくづく思うのですが、私は、まだ人さまに、全く無料で、講義をしたり、原稿を書いたことがありません。光円僧正が、私に授講された歳になつても、まだ師恩に酬ることは、なに一つやっておりません。お恥しい次第です。

私は、三年ほどいた戦地が中国でしたから、多少中國語を覚え、中國の文化には強い関心を持つっていました。それで曼殊院から山沿えの径を降りてゆき、北白川に出て、塚本善隆先生を、京大の人文研に尋ねました。塚本先生は、中国は上代仏教が御専門で、それは当時の人文研が、上代研究が盛んなことにもよるようです。

が、私が参りました頃は、南北朝にまで降りてこられて、揚州總管晋王広、のちの隋の煬帝ですが、揚州仏教のところまで研究が来ておりました。江を渡れば江南で、その先には天台山があり、『天台智者大師別伝』の研究を、法華三大部と共に、やろうとしていた私には、まことに好都合で、ここでも両三年、御指導を受けることになりました。

塚本先生の研究班は、丁度『肇論研究』の仕上げの時で、梶山雄一、服部正明などの後の京大教授が、まだ特研のころで、このようない優秀な人たちの片偶に、小さくなつて、聴いてばかりいました。

すると、隣りにカスリの着物を着た、まだその頃は横井姓の、柳田聖山氏が、ガリ版の祖堂集を風呂敷包みから出しては、見ておりました。そして鈴木大拙先生のところに行つて、うかがつて来た話をされました。彼は入矢義高先生について、『祖堂集』を読んで貰つておりました。誘われるまま顔を出したこともありましたが、私は長づづきしませんでした。

先生と云い、同学と云い、これ以上めぐまれた条件は、後にも先にもなかつたわけですが、私はどうも禅学は身に付きませんでした。これは大変罰当たりのことをした、と今日思つております。と申しますのは、本学の禅学に大きな穴をあけたことになつたからです。このことを本日は申上げたいのです。

ございます。

先程申し上げましたように私と鏡島先生との間には、八年間のブランクがあります。それを私が師命とは申せ、天台をやつてしましましたから、ずっとその間が開いてしまった。あの時、柳田さんと一緒に、入矢先生について禅籍を読めばよかつたんだ、と後年どんなに思いましたことか。

と申しますのも、光円僧正の下で『天台四教儀』から『大本四教義』、さらに『法華玄義』へと、天台のセオリーパー通り読みすすむ中に、あれという間に両三年間は経ってしまいました。あわてて『摩訶止観』の手ほどきを受ける始末で、中国天台だけでもゆうに二十年はかかりましたが、なかなか纏りません。その上、日本天台に来て、中古の口伝法門に足を踏み入れて更に十数年、それでもまだ道元禪師の研究には、手がとどきません。

こんなことなら、あの時禪学をやつていたら、それは戦後の駒沢に絶対に必要なものであり、こんな苦労をする必要はないなかつたんだ。自から求めたとはいえ、おれは貧乏クジを引いてしまった、と何度も思つたかしれません。

本日、司会をなさっている石井修道先生はじめ、皆さんが、大成された柳田禪学を学びに京都に行かれるのを見て、羨しいような、また申し訳ないような、奇妙な思いに、いつも駆られます。

うに及わず——。語学の天才の見本のような方で、我身の語学力のなさを、いやというほど歎かざるを得ませんでした。

また話はとびますが、学園紛争の真最中、ハーヴィッジ氏は本学を訪れてくれ、二十年振りの再会を果しましたが、教務をやっていたので、ろくな話してもできず訣れたのは、今でも心残りとなっています。

昭和五十年ごろ留学した平井先生の話によると、ブリディ・シュー・コロンビヤ大学の学部長をしているとのこと。今日では、アメリカの仏教学研究の大御所的存在であるらしい。年長の私が、リタイアするのも、当然どころかむしろ、遅きに失した感すらあります。

兩三年して、京都から本学に帰ろうとしましたが、鏡島先生

生が回顧談で書いておられる通り、新制大学は発足したもの。昭和二十年代の後半は、本学の経営は火の車で、お寺で食えるものは寺へ帰れ、と申渡された時代です。私は、小川先生の駒沢学園に行こうと思いましたが、ここは更に火の車で、経営に苦心慘胆している先生の姿を見ては頼むわけにゆきません。

その時、小川先生は私に言いました。お前は鶴見に行けば入れて貰える、ともあれ鶴見に行きなさい。当時の鶴見学園は、創立者の中根環堂先生が健在で、私が卒業する時の本学の学長でもありました。私の顔を見るなり、なんだお前か、

どうせ一、二年の腰掛けだらうが、と厄介者の私を置いてくれました。先生は駒沢の複雑な事情を、とうに御存知だったのです。私も、長居をするつもりはなかつたのですが、教頭の渡辺潜龍先生、武田、森田の両先生、それに同窓の桜井英宗先生などがおられ、とても住みごごちがよかつたものですから、八年ほど専任でおり、兼任を合せると、十四年ほどになります。その間にいろいろのことが、ございました。

三十四年中根先生がお亡なられ、つづいて学監の中野愚堂先生が急逝されたものですから、後任の三沢智雄学長の下で、短大を四年制大学に格上げする、事務の仕事をすることになりました。この時、角家、横尾の両氏が私を助けてくれました。

馴れない、そんなことをしている私を、見かねたのでしょうか。若月先生が声をかけてくれ、私は、助教授として昭和三十六年、本学に帰ることができました。本学が高度生長のルートに乗り始めて、総長の保坂玉泉先生は講義をしているひまがない。その穴埋めということで、保坂先生の授業の一部を担当したわけです。兼任としては先に申した三十四年の増永先生の補講からで、二年ほどです。

演題の「五十年の回想」の五十年は、正確には卒業した昭和十七年から平成五年（昭和六十八年）までで、入学からは十五年になります。その中から鶴見の専任八年間が抜けるこ

となります。

さて、本学に戻つてクラスを担当してみると、昭和三十六年度には、中野東禅師がいました。今、教化研修所で活躍しております。そして、三十七年度に、そこで司会をされている石井修道先生、それに袴谷憲昭、吉津宜英の両先生、この三人がおりました。三人とも学生時代から大変優秀で、現在、仏教学界の中堅となつて活躍しているのは、御承知のとおりです。

私も、まだ若かつたから出来たのでしょうか、クラス全員の面接を、ひとり一人丁寧にやりました。嫌がられる面もありましたが、我慢して数年つづけてやりました。そうして、私も、そうであったのですが、寺に生れて寺を継ぐ矛盾を抱えた人たちに、毎日接したわけでございます。そういう悩みは、いうなれば宗侶の妻帯在俗の結果生まれた世襲相続によるものですから、出家至上の伝統宗学を以て解決できる問題ではありません。

これは宗学そのものを、在家化している教団の立場に主体性を置いて組み直す必要がある、そう真剣に考えるようになつたのです。

もつとも、非常勤講師になつた昭和三十四年に、私は、洞門における在家宗学論を「中外日報」に再度発表して、物議をかもしていましたから、その下地は充分あつたのです。

その時は、仏教学部長の榑林皓堂先生に、太子堂の自宅に呼ばれました。榑林先生は、岸沢惟安に京都の紫竹林で師事されました。が、その紫竹林学堂を、岸沢師に次いで董したのが衛藤先生でありますから、いわば岡本先生や小川先生とは同門であります。お三人とも大変仲がよい。よく道憲寮などて三人して話し合つてゐるところへ、寮生の私など、お茶を運んだものでございます。

榑林学部長としてみれば、その誼みで、鶴見から私を呼んでやつたのに、あたかも岸沢惟安師の奉ずる伝統宗学を否定しかねないような在家宗学論を、まだ講師の分資で、『中外日報』紙上で堂々やつたものですから、先生としては立場上、たいへん困惑されたわけです。こういうことを言つておると、お前は駒沢に置いてやらないよ、と真顔で言われました。

しかし、若さというものは、恐ろしいもので、そう言われば言われるほど、私は在家宗学論を極端にまで持つてゆこうとする。榑林先生にとっては、随分ご迷惑のことだつたと思います。結局、ことの眞実を識つてゐる先生は、私を庇つてくれたのです。駒沢に置いて面倒見てくれたのです。

それから十年ほど経ちまして、榑林総長の時に、例の学園紛争が起きました。私はその下で、当事者の一人として働くせて頂いたわけでございます。先生とは、そういう深い御縁

が、更に出来るのですが、これはまた後程申上げます。

こうして学生たちとの面接の場から、ともかくも現実を踏えて、私の在家宗学論は、さらに鞏固なものとなり、今日まで叫び続けて現在に至っています。今となっては多少硬直した部分も出て参りましたが、まとめておくようにとの要請が宗門当局からもありまして、平成二年の暮れに、従来の所論をまとめて、一書として世に出しました。学生のときお世話になつた道憲寮の開基、来馬道憲師の法孫、規雄師が教学部長の時で、今後の教団の在り方に、どれだけ影響を与えるか分りませんが、初一念だけはなんとか纏めて置きましたから、どなたか御関心のある方に、後を継いで頂ければ、有難いと思つています。宗侶としてこの問題は、絶対に避けて通れぬことなのですから――。

もう一つ、私にとって避けて通れぬ問題がありました。それは戦争体験というものを、どう収束するか。戦中世代の責任を、そのままにしておくことは許されないと思いまして、やはり昭和三十六年に、「戦いに斃れ傷つきしわが世代」を大学新聞に書き、翌三十七年に、同世代の人たちの戦争体験をまとめて『駒沢に竹波打ちて』を出したことは、初めに申し上げたとおりでございます。やはり駒沢に生きた人たちの、ひとつの精神史の流れを、よかれあしかれ、戦争への悔恨と懺悔とを覃めて、綴つておきたかったのです。今から見れ

ば、それは限られた世代の自己主張にすぎず、いささか大げさの觀がなきにしもあらずですが、それがやはり時代といふものであり、ひと区切り着けておいてよかつた、と今も思っています。

結局、目先の在家宗学論、これは宗門子弟教育の急眉の問題、それに戦争体験に伴う戦争責任や国家悪の問題、そういうことで頭が一杯となり、とても天台学や、それと宗学との関係を追及するという本筋の方は、トントおるすとなつてしましました。三十年代後半は、両者に關係する論文以外は、書いておりません。

そのうちに、東京オリンピックが開かれた昭和三十九年ごろのことです。私の傍へきて『御抄』<sup>（ごじょう）</sup>『御抄』<sup>（ごじょう）</sup>と、こうるさく言いう人がいました。峰岸孝哉先生で、おそらく鏡島先生の『御抄』の講義を聴かれたのでしょう。『御抄』研究の必要なことを、今津洪嶽先生のお話やらを交えて、しつつこく話しかけるのです。

峰岸先生は、道憲寮で私のずっと後輩のせいもあって、その気安さからですから、怒るわけにもゆかず、適当にあしらつておりました。『御抄』というのは、晩年私が取り組んだ『正法眼藏聞書抄』<sup>（さきがきしょう）</sup>のことです。この『御抄』の存在を、その研究の重要性を、実際に私に知らせてくれたのは、実は後輩の峰岸先生だったの

です。

いくら禅学の嫌いな私も、必須単位の禅学演習だけは取りました。神保如天先生で、『正法眼藏注解全書』を安藤文英師と刊行した苦心談ばかりしていました。その時詮慧和尚が『聞書』を書いたことだけは教わりましたが、峯岸先生に今更いわれても、なんの興味も抱きませんでした。

と申しますのも、私は、なんとか専門の中国天台学をまとめて、学位論文を書かねばならない年齢になつておりました。正直いって『御抄』どころではなかつたのです。峰岸先生の話に乗つてやる余裕はありませんでした。

あの時、よく話を聞いてやり、『御抄』研究の重要性を悟つてですね。今、伊藤秀憲先生のやつておるような口語訳までを含めた、インデックス作製までの仕事をですね。彼に道筋をつけてやらせるべきだったのです。それが先輩としての役目だったのに、私は、それをやりませんでした。そうしたら峰岸先生は、今ごろは押しも押されもしない『御抄』学者に成つていたと、よく彼に謝るのですが、このミスリードを、今でも深く反省しています。

情けは人の為ならず、ではありませんが、もしあの時、峰岸先生をリードするため『御抄』に深くかかわっていたら、私の生涯の研究目的となつた『聞書抄』は、すくなくとも五年、いや十年は早く手元に転がり込んだはずです。私は、あ

まりに遅く『聞書抄』に辿り着くことになります。無念の至りで、このことは最後に申し上げます。

さて学位論文も出し、八年間据え置かれた助教授から、やつと教授になつたのが、昭和四十三年、これにはちょっとしたハブニングがありました。天台学界を率えていた大正大学の関口真大先生とは同郷でもあり、随分と親しい御指教を受けましたが、それだけに『中外日報』の紙上をかりて、だいぶ論戦も交えました。

昭和四十二年、例の『達摩の研究』が出て、その書評をかねての論戦を、やはり『中外』でやつたのですが、初めの論戦から数えると、尤に七、八年になる、もう助教授から、いかになんでも教授になつてているだろうと。『中外』の本間記者（現、中外日報社長）は、私のことを山内教授という肩書きで、書き出し、紹介しました。一二、三度論戦が交されてから、誰か注意したと見えて、途中から助教授に格下げになりました。なんと万年助教授を世間にさらすことになりました。

そんなきさつを見た苦労人の藤田学監先生は、早速、私を翌四十三年に教授に格上げしました。当時は、学部教授会というものはなく、人事は大学当局が一手に掌握しております。ともあれ私の教授昇格は、世にいう新聞辞令のおかげだったのです。尤も、藤田先生にしてみれば、当時の仏教学部は、戦前からのオーソリティが教授として健在で、助教授

は事実上私一人、講師はありません。これでは文部省に教員構成の表を出す時間題で、皆が教授というわけにはゆかない、今年も助教授で我慢してくれと言わされておりましたので、私としては、たいして気にもならなかつたのです。先程申しましたように、私のすぐ上の鏡島先生とは八年も離れており、とても先生と肩を並べて教授になるなど、思つても見ませんでした。

学部の事情はどうあれ、人間歳の方は、おかまいなく取りますから、教授になつた時は四十八歳、もう少しで五十に手がとどく、今からは考えられないようなことです。その四年間に学園紛争が起り、大学はその後どうなつたか、偉い本日は経済学部の西村先生がお見えになつていて、恐縮致しておりますが、これは皆様御承知のようになつてゆくわけでございます。

四十三年、紛争発生と共に刷新委員会なるものがてきて、

一年間かけて諸規定を作り、四十四年の新学期から、これを実施することになりました。それによると、教務と学生の二部長は、教授から出るということで、前の年教授になつたばかりの私のところに教務が廻つて来たのは、いうなれば年格好の者が居なかつただけで、私にはまことに不向な役柄であることは、みずから承知致しておりました。戦中世代の人々の結果が、私を引っぱり出しただけです。

学位論文をなんとか提出して、それを踏えて、天台と宗学との関係を本格的にやろとしている矢先で、出鼻をくじかれまして、とうとうその時の学位論文『禪思想史より見たる天台止観の研究』を刊行したのは、なんと十七年後の昭和六十一年のことです。

学園紛争さえなかつたら、もう少し私は、ましな学者になれたんじゃないか、自分のアイドルなのを棚に上げて、自からを慰めている始末です。論題には、一つの想出があります。最初は単に「天台止観の研究」とつけたのですが、鎌田先生が、私の場合は「禪思想史より見たる」と頭につけた方がよい、とアドバイスしてくれました。内容からして、それが相応しいことを、よく識つておられたのです、傍にいた高崎直道先生が、早く出版した方がいいと、とすすめてくれました。当時は、三人して「仏教一般」などの教科書造りを、愉しくやつていた頃です。

年長の私が音頭を取り、高崎先生に第一部のインド仏教、第二部の中国仏教は鎌田先生にお願いして、第三部の日本仏教を私が書きました。お二人は御周知のように、鎌田先生は華嚴の研究で、高崎先生は如來藏の研究で、学士院賞を受賞されました。このような後の天下の碩学と、三人ともまだ気軽にポジションで、共に過した数年間があつたことは、菲才の私としては、たいへんな学問的啓発を受けたわけ

で、今もって感謝致しております。

いよいよ学園紛争のことにつれねばなりませんが、その発生は一般的な原因に加えて、また本学だけの、特殊な事情もあったようです。三十年代半ばから藤田学監の施策宜しきを得て本学も高度生長の波に乗り、二千そそこの学生は一挙に万余のものとなり、従来の宗門大学の概念では運営しきれない面が、多々発生して参りました。

その上、学部学科の増設に加えて、北海道への展開もあり、内部的な対応をするいとまもなかつた、というのが正直なところだつたと思います。

授授会ひとつを取つてみましても、連合教授会というの

が、ただ一つあつただけで、各学部教授会というものはありませんでした。その連合教授会の構成員も、教授だけでした。助教授、講師は出席できない。ただしクラス主任や学年主任は、御下問に答えるということで、隅の方に坐つておりました。発言はできません。ただ聞いているだけで、退屈なものでした。

このような一時しのぎの連合教授会を解体して、まず基本

となる各学部教授会を作ることから始めなければならない。そのうえ当面する紛争に対処するため全学の意志を決定するような全学教授会も作らねばならない。それも一年間の短期間に諸規定を作り、次の年から実施したのですから、まさに

学内はテンヤワソヤ、そのうえ全共闘のバリが年毎にあり、学内では教授会も、事務も、満足には出来ない状態が、三年間も続いたのです。

昭和四十七年三月、私は教務を、二年先輩の桜井秀雄先生に引受けて頂き、辞める時、刷新委員会、全学教授会、正常化審議会をはじめ各種の出席した委員会の自分のメモを丹念に集め、資料と共に現在も保管しております。これを整理して、まとめることが、あるいは私の定年退職後の、本学に酬ゆる、残された仕事かも知れません。期待はなさらん方がよいと思われますが、残生のつれづれに誌めておきたいと思います。

規定作りの中心となられたのが文学部の木代修一先生で、東京高師から文理大、さらに桐朋学園と歩まれた先生は、学校規程の表裏に通じておらました。その上、戦前の、まだ専門部地歴学科の時代から講師として本学にお見えなり、駒沢のことはよく御存知でした。親子ほど年の違う先生に、こう申しては失礼かと存じますが、俗にいうウマが合うと申しますか、何でもお話しでき、教えて頂きました。

何んでも、高師の附属で、中村元先生に教えたとかで、提出させた歴史のノートが、あまりに立派なので驚かれた、そのことを、やはり本学に来られていた宇井伯寿先生に話したことがあるそうです。

学部教授会の規程をはじめ、木代先生は、諸規程のタタキ台になる原案をお作りになり、それらを委員会にかけて、成案にもつてゆく、辛抱づよいお仕事を、刷新委員会の第一部会で、一年間なされました。

第二部会の議長は、経済学部の長谷川忠一先生で、勢力的にこれをまめ上げられました。私は、西村先生などと共に、この第二部会にいたので、よい勉強になりました。

ですから、四十四年から新規程で発足してからも木代先生から、私は、規程の分らない点や、運営の方法など逐一教えてもらい、やっと職務を果すことができました。九十歳の長寿で、お亡りになるまで、ずっと御交誼を、公私ともに賜りました。

もう一人、お世話になりました方に、法学部長の野田孝明先生がおられます。先生は、私立学校法の原案作りにも関係されたとかで、殊のほか学校法規に明るく、木代先生とは別の意味で、規程を作る順序や、その齊合性などを、教えて頂きました。

法律には全く無縁の、というより全く興味を持つていなかつた私も、これは学問をした者なら誰れも分ることなのですが、法律のもつ論理性やその手順の齊合性に、いつしか先生の説明があまりに上手なものですから、魅かれて行きました。あまり熱心に訊くものですから、先生は笑われて、「あ

なたも法律をやればよかつた」などと、先生には珍らしい冗談を言わることもありました。先生も、宗派こそ違え、寺院に関係があることを申されておりました。

私としましては、何とか皆さんの中で、出来たばかりの規程の説明を、要領よくしなければなりません。それが日課のようなものですから、一生懸命だったわけです。それが何とか出来たのも、勝手の分らぬ私を、それこそ子をさとすように懇切に導いてくれた野田先生があつてのこと、今でも感謝しております。

野田先生について、忘れ得ぬ想い出が、一つあります。それは給与委員会のことです。

新制度の発足と共に、教職員の給与表が新たに出来て公表され、学内は明るくなりましたが、さてその運営はとなると、適當の機関がありません。そこで給与委員会なるものが出来たのです。ことあるうちに、その所管を教務に押しつけて来たのです。理由は、査定の資料が教務にあるから、とのことです。

学部教授会の議事録の作り方から始めなければならない教務に、そんなことを引受けれる余裕は全くありません、教務の職員の帰りは、九時十時が毎日普通です。それが六月ごろまで続く、六月になるとちょと一息つく。明るい中に、帰ると、おてんとうさまがまぶしいなどと皆言つておりました。

仕方がないから、給与委員会の構成メンバーのタ、キ台を作つてみました。うまくゆきません。教育研究を担当する教務のあたまでは、学部学科の編成が基本となりますから、教員の生活や福祉の面が主となる給与委員の構成を合理的に割り出すことはできません。これは全く別の問題です。思い余つて野田先生ところに訊きに行きました。先生は言下にいわれました。「この問題は、明治では組合が解決しました。」「駒沢は十五年おくれている。」といつたのが印象的でした。私は、そういうものかな、と思いました。それまでの駒沢には互助会なるものはありましたが、組合なるものはありませんでした。組合というものを実感したのは、この時が始めてでした。早く、そういうものが出来て、この問題を解決してくれればいい。野田先生がいうのだから、いづれ出来ることであろう。私としては日先の、教務の所管でないことを願うのみだったのです。

それから数年経つて駒沢にも組合が出来ました。私は、ああ野田先生の言う通りに、やつとなつた、との思いがありました。それにしては、十五年はかかりませんでした。皆さんが協力して差を詰めたのは明らかです。場違いの教務で、給与委員会の構成に苦労したことが嘘のように感じられました。

たことばでした。おそらく野田先生あたりがルーツかと思われます。私には、それは奇妙に思われました。もつとおくれていると思っていましたからです。そつと本学出身の、地理学科の旧友、桜井正信先生に聞いたことがあります。「駒沢は十五年おくれているというけど、三十年はおくれているんじゃないかな。」世事に明るい彼は、例のしかめ面で言いました。「気安めに言ってくれてるんだよ。」私は納得しました。あまりおくれているというと本学の者がやる気がなくなるので、皆さんが十五年と言つてくれたのです。

ひとこと申しおくれましたが、全共闘との激しい折衝で、学生部長の長谷川誠一先生が倒れられ、そのあとを法学部の柿本啓先生が継がれました。柿本先生とコンビを組んだのは最後の一年間ほどでしたが、先生は實に勢力に働かれまして、百万の味方を得たような思いでした。五十そこそこでお亡りになり、これもあの時のせいかと思うにつけても、お氣毒の限りであります。人なつこい気さくなお人柄は、今もつて忘れることが出来ません。心から冥福をお祈り申上げる次第です。

それにしては、その後の本学のあゆみは、目を見張るものがありました。全学教授会には、かれこれ十年ほどおりましたが、新規程のためズタズタになつた旧学則や、宗務庁の教育規程などとの調整修復をすることが、教務をやめた私に、

与えられた仕事とはなりました。この委員会は兩三年つづきましたが、私としても博林総長の時は、書斎に帰ることは、いかになんでも出来ませんでした。七年あまりの御苦労のすえ博林総長は退かれましたが、よく八十を越す老体で、あの難局をのり越えられたものと、今でも驚嘆しています。

次の岡本総長の時は、疲れ果てて何のお役にも立ちませんでした。が、何んといつても道憲寮からの、四十年に及ぶ師弟の間柄ですから、陰に陽に心配の種はつきません。定年制や首脳人事の問題があり、岡本先生の心労は大変なものでした。岡本先生が総長在任中に亡くなられた時、私の心身も限界で、これで本学への勤めは畢った、やつと書斎に帰ると、本当に思つたものでした。

年齢的にも師弟の関係からも、私は、岡本先生と組むものとばかり思つていました。その時は仕方がないと観念していました。博林先生のとき引張り出されたのは、学園紛争で急に前の人気がいなくなつたからで、一足早すぎたのです。ですから、岡本先生が亡くなられれば、それで私の務めは終つたことになるのです。

ところが、次の大久保道舟総長の時、またしても引っ張り出されました。大久保総長は予想しなかつただけに、これはこたえました。昭和四十三年の刷新委員会から、すでに十年余の歳月が経つていました。私立の大学では、教授は勉強ば

かりしているわけにはゆきません。年格好になれば、大学の運営や学会の仕事に走り廻るのは、あたりまえです。しかし、これにはやはり年限があるようと思われます。せいぜい数年が限度で、それ以上ですと肝心の学究の方が台なしになります。今では皆さん、上手に交替なされているようですが、それが宜しいように思われます。

それはそれとして、ともあれ四十七年からは学部に帰ることができましたので、学園紛争の後始末をお手伝いしながら、大学院の方は、それまでに開講していた『法華玄義』と『摩訶止観』に加えて、『天台本覚論』を、やつと講義するところに漕ぎつけました。一番やさしい『真如觀』から始めたのですが、勝手が分らず随分と苦労致しました。すでに天台での恩師山口光円僧正は亡く、聞きに行く人がおりません。

こんなことなら恵心流に明るい光円僧正に、もつと急所を聞いておくべきだったと思いましたが、後の祭りです。人生とは、こんなものです。仕方がありませんから、そこで田村芳朗氏との文通が始まったわけです。田村先生とは、学会の役員会などで挨拶した程度、面識はないにひとしいのですが、御専門の本覚法門を挟んで、随分と書簡を交換し、御指教を頂きました。私より二年ほど年下ですが、さすがに本覚法門一筋の学識は、他を寄せつけないものがございました。

田村先生の研究が前提となつて、私の初著『道元禪と天台

本覚法門』が出来るのですから、氏から蒙った学恩は大きい。

先年、物故されましたが、私としては最大の晩年の話しあ相手を失つたことになります。

天台本覚論を開講したものの、数年間は、私自身が解らなかつたのですから、この間受講された方々には、まことに申訳ない限りで、その不幸の方々の中には中尾良信氏をはじめ、現在学界で活躍されている人もおりますから、先生の講義の方はあまり関係ないのかも知れません。

『法華玄義』と『摩訶止観』の方は、これは叡山専修院に、そのサンプルがありますから、ずっとラクとはいいうものの、内容は『正法眼藏』同様、とくに『摩訶止観』は、難解難入です。が、ともかくも毎週授業があるから読んだようなもので、どういうわけか定年の今日まで受講者が、細々ながら絶えなかつたことは偉いで、そうでなければ懈怠では人並以上の私は、とうの昔に止めてしまつたことでしょう。

ともあれ、二十数年絶えずに読みつけたことが、『摩訶止観』と『正法眼藏』という、私の最後の論攷となるわけで、これも絶えなかつた受講者たちのお陰で出来たようなものです。宗門大学に奉職でき、そこで永年『摩訶止観』を読ませて頂いたわけですから、これと『正法眼藏』との関係を明らかにするのは、私の当然のつとめと思つておりますが、果して出来るかどうか、あまり期待はなさらない方がよ

いと思われます。

併講した『法華玄義』の方は、もともと教相の好きな私としては、この方に力を入れたかつたのですが、いつしか『止観』中心となるのは、やはり本学の性格上、やもうえません。三大部の中の『法華文句』は、とうとう読みませんでした。これは叡山でも読まないからです。これには復雑な事情がございます。

この『法華文句』の成立について、三論教学の立場から、画期的な研究をここみられたのが、平井俊栄先生の『法華文句の成立に関する研究』で、平井先生とは天台と三論とは隣りどうしということで、竹友舎で研究室を共にしたこともありました。

同じ小川門下ということで、気安いお付合いでしたが、そなことが却つて、この中国仏教の根幹をゆるがすような研究を、世に紹介する立場にありながら、自分の研究にかまけて、できないでおることは、誠に申訳ないことと思つております。あの世とやらで小川先生に叱かれるとしたら、このことであろうかと思つております。

おそらく平井先生の研究の前提となつた佐藤哲英先生の『天台大師の研究』、この佐藤哲英先生を竜大の研究室に訪ねのがやはり昭和二十六年の京都遊學中のこと、そこでは若き日の先生が章安灌頂の筆録と、天台大師説との腑分けを、熱

氣をこめて語つておられました、まさかそれが現実のものとなるとは、夢にも思いませんでした。当時、佐藤先生は竜大の学生部長をしておられました。

それが今日では学界の定説となり、研究室で目の前にいた平井先生から、はるかにそれを上廻るような『法華文句』の成立に関する、従来の研究を根底から覆すような成果が発表された時は、これまた夢にも思いませんでした。塚本先生にも智者滅後の天台教団に関する論攷があり、章安の晩年については、私も関心がなかつたわけではありませんが、これほどまでに平井先生が、異常な執念を持つて、章安をトコトン追い廻すとは、思いもよらなかつたのです。

このたび余暇を得てからでは遅きに失するのですが、現在、天台関係では顯教をやっている人が尠いので、時機を失して申訳ないのですが、なんとか天台からの反論がないことには、点睛を欠くことになりますで、こころみて見たいと思つております。これも御期待は乞わない方でござります。

『聞書抄』の研究は、私としては、いわば儲けもので、ここまで出来るのは思つても見ませんでした。鏡島先生の好きリードがあつたので、『御抄』の研究に入れたとは、先に述べたとおりです。が、入つて見ると、それは七十五巻本が所依で、本覚法門からの研究で終るのは、何か、もつたいないような気がしてきたわけです。

というのも、『聞書』が、天台をやつていると、ことに拙著に、幾度か書評を頂きましたが、その中に大器晚成型の

学者である、というのが御座いまして、身のぢぢむ思いがするのであります、大器はしばらく描きまして、晚成型であるのは間違ひございません。

それにしても母校とは有難いもので、六十五歳で主著を出すまで、私を、文句もいわずに置いてくれたのです。とても他処さまでは、こんなわけにはゆきません。あわてて翌六年に、従来のものをかき集めて、『禪と天台止觀』を出しました。こんなもの恥かしくて、とても恩師には見せられません。

やつと第三巻目に、『正法眼藏聞書抄の研究』が出来まして、恩師に捧げられるような内容となりましたので、これを豪徳寺の衛藤先生の墓前に供えました。この書に鏡島先生は、同門の先達として、心温る序文を下さいました。今でも銘肝しております、

本覚法門をやつしているとよく分るのです。そこで『聞書』か

ら『抄』へのプロセスが見えてきましたので、『続聞書抄の研究』が出来たわけです。これが私の、おくればせながら試みた宗学研究の、第一巻になります。平成三年四月の刊行で、定年の一年前、七十一歳の時です。

教学を廻り途すると、宗学に入るのが、なんと遅くなるとか、そのサンプル見たいなもので、おすすめできません。困ったことには、そこでは肝心の『仮性』の巻の後半を書き残す結果となりました。いかになんでも『仮性』の巻を宙吊りにしておくわけにはゆきません。生来の怠惰に鞭打って、

とうとう昨平成四年七月、定年を間近に控えて、『第三聞書抄の研究』を出し、『仮性』の巻の後半から『大悟』の巻までを済せました。

しかし、これでも、また十八巻がすんだだけです。七十五巻には、ほど遠い。そこで第四巻を目下入校中ですが、これでも『山水経』まで、やっと三十巻ほどです。平成五年十二月ごろ出ると本屋はいつております。

定年前後になつて、慌しく本の刊行をするなど、みつともない話しだすが、私としては、生来の怠惰のツケが廻つてきましたようなもの、誰にも文句の言いようはありません。どうか皆さまも、著述は早いほどよい、それだけ責任を持つことにありますから、学業も伸びるのではないかと思います。くれぐれも、私は、わるい見本であります、私の真似だけは、ぜ

ひともなさらんように願上ます。

しかし、定年といふものは有難いものでござります。第一巻を六十五歳の時、出したその翌年、昭和六十一年四月に、あと七年ですよ、という通告を大学当局から受けました。その七年が、あつという間に過ぎて、本日となつたわけであります。通告を受けた時は、私は正直慌てました。あと七年しかない、それなのに主著は第一巻しか出ていない。それから七年間は、文字通り火の車のようなことになつたわけでござります。

古人は、頭燃かねんを払うが如くせよ、とかうまいことを言いますが、凡下の身としては火事場のさわぎもよいところで、とてもそんな上品なことは言つておれません。取りあえず、從來の論文をまとめて第二巻を出し、あとは『聞書抄の研究』を四巻ほど出したところで、チヨンになりました。

こんなことなら、なぜ、あと五年いや十年早く『御抄』の研究に入らなかつたのだ、そうすれば、すくなくとも七十五巻の大半は済んだはずだ。おのれの迂闊さに、後悔ほぞを喰んでいる始末です。しかし、これは出来すぎた話でありますて、私などは、七十五巻の何分の一でも出来れば、それを以て瞑すべきでありますて、かりそめにも三十巻までは手が届いたことで、有難いと思うべきかも知れません。

それでも定年の通告を受けてからの七年間は、われな

がら充実した日々を送ることができました。私のような優柔不断の人間は、定年が昔のように七十五なら、それまではやりません。七十ということで、二年ほどおまけを頂きました。七十二ということで、そこで、なんとかまとめて頂いたわけでございます。人間一生にできることは定<sup>きず</sup>つています。その意味では、定年は七十でも、七十五でも同じことです。早目にやるか、遅目にやるか、の差だけです。

定年が五年早まったお陰で、私は、それだけ得を致しました。昔のように参事会の議をへて、七十七までおりましたら、それまで今の仕事を引き延して、したに違ひありません。七十定年ですと、あと一丁場あるような気が致します。

定年は早い程よい、その方が充実した人生が送れる、私のような優柔不斷な人間には、人生のケジメが、何よりも大切なようです。

最後に、学問上のしめ括りを致しますと、私のやりました天台本覚法門は、道元禅との接点になるというわけで、本証妙修のルーツを、そこに搜しに参ったわけがありますが、結果的には、ありませんでした。まったくの無駄足で、空振りだったわけです。結局、これは逆だったんですね。大正大学の畠慈弘先生の戦前の論文をよんでも、それも何遍もよんだはずの論文なのですが、無駄足のおかげで、やっとその真意が分って、道元禅師は本覚法門を批判するどころか痛破している

のが分りまして、出発点とは逆の結論とはなつてしましました。そうしたら、この論文をですね。こともありますにチベット学の山口瑞鳳先生が取り上げられて評された。

私の研究は、鏡島先生の研究を土台に、河村先生の考証学を拠りどころにして、『聞書抄』をですね、本覚法門の視点から見るという、中古天台の局<sup>かぎ</sup>られたものにすぎません。

とても仏教学一般に展開するといったような、おおげさのものではありません。それが山口先生の御指摘を受けて、チベット学の方からですね。袴谷先生や松本先生から、いろいろの批判や論評が出まして、ここに本覚思想批判という、大きな問題の前に引き出されたわけです。私は単なる火種の提供者に過ぎなかつたのです。

確かに口伝法門という、得体の識れない本覚法門というものを、洞門の立場から、叡山から持ち出した、というか追い出したのは私ですが、俗に山より大きい猪はいないと申しますが、この猪は予想外に大きかつたようです。そして、その猪をですね。捕らまえようしてですね。若い先生方が、麓の方で網を張つて待つていようとは、夢にも思いませんでした。

私にとつては、結局、口伝法門というのは無駄足だったのですから、こんな閉鎖的な、出口のない学問は、貧乏籠を引いた私ひとりがやればいいんだ、後学の人はやつてくれる

な、という意味のことを最初の本の終りに書きました。

ところが、とんでもない、本覚法門批判を含めて、本覚思想批判はどんどんやらなければいけない、という袴谷先生の御意見でありまして、私は計らずも六十五歳を過ぎましてから、初めて学問の論争の場に引っ張り出されたわけでござります。人間さいごまで諦めずにやつて見るものでござります。私の学問が、いろいろの評価を受けたのは、定年を通告されてからの、わずか七年間に過ぎません。それも、私がクラス主任をしました昭和三十七年入学組の、諸先生によつて、華やかな宗学論争の場に引っ張り出されたのでありますから、私としては、学者冥利に尽きるわけでございまして、それで論争過程などを『第三聞書抄の研究』の末尾に載せておいた次第です。

難しいことは、今日は一切省略致しまして、そういう人達によって、貧しい学業にもかかわらず、晩年の花道を作つて頂いことを、心からお礼申上げる次第でございます。それにつきましても、教学から宗学へ参入する時機を捉えて下さった鏡島先生、『聞書抄』のテキストを提供してくれた河村先生、この両先生の協力がなければ、私の本覚法門からの研究は、土台成り立ちません。その他、禅学、仏教学の先生方から、大変な御支援を頂きまして、おしまいの頃は、これはもう自分が書いているんじゃない、皆さんによつて書かれて

いるんだ、だから書かねばならない、本当にそういう気持になつて、『聞書抄』を書き継いだわけでござります。とても私ひとりでは、七十五巻に立ち向つてゆく気には、とうていなれません。

それにしても七十五巻は長すぎます。あと、まだ四十五巻が残つております。公私共に私のことをよく識つておられる鈴木格禪先生は、こう申されます。「先生、厭きずにおやんなさいよ」と。格禪先生は、私のすぐ投げ出す性格を、よく知つてるので、もう嫌になつて『聞書抄』の研究を、止めんじあないかと心配されておられます。まさにその通りで、一巻おわる毎に、もうこれでおしまい、と思いながら、とうとう四巻目まで参りましたのも、『眼藏』参究と体裁のよいことを申しますが、結局、参究ということは、辛抱することなのだ、ということを格禪先生から教わつたからです。教学から宗学に入った者は、先を見るものですから、この辛抱ができないのです。思師の衛藤先生にも、この傾向がなかつたとは申されません。それを識つている格禪先生は、「もうすこし、我慢しなさいよ」と励ましてくれますが、いつまで続くことやら、覚つかない次第です。

『眼藏』参究などといふ格好のよいことは、所詮、禅学が嫌いで逃げ廻つた私には、無理のようです。そこで一方では、先程すこしばかり申し上げました『摩訶止観』と『正法

眼蔵」と申しましても、これは『摩訶止觀』の講義が主体となります。ですが、やはりこの方も、なんとかまとめたいと書き継いでおります。教学的視点を失うことは、『聞書抄』に没頭しております。でも、やはり恐いのですね。もつとも、これを失つたら、私の研究は、その意味がなくなるかも知れません。そんなわけで、これも、どうの昔にまとめておくべき『摩訶止觀』講義を、定年後の残りの日々に、どこまで書けるか、書きつづけてみようかと思つております。

ありてい申しますと、これも、老人のボケ防止の一助でありますて、たいした意味はないかもしません。やはり若い時に、きっちとしたものを出しておくべきでした。

いづれに致しましても、私の晩年は、やつと生涯の仕事にめぐり遭うことができまして、中途半端ではありますが、業績らしいものを、おくればせながら遺すことができました。そのため公務の方は、一切御勘弁願いまして、たいへん身勝手のことをさせて頂きましたことは、仏教学部の諸先生はじめ皆様に、本当に申し訳なく存じております。

永くいた割には、たいした功献も大学にせず、五十年の回想をするわけありますが、本日は、はげしい風雨にもかかわりませず、沢山の方々に御出席を頂きました、心から感謝申上げます。中には遠く北海道から、あるいは関西の方面からもお見えになられて、よくぞお集り頂いたと感謝致しております。

ります。これら講義時の、なつかしい顔ぶれを、生涯心に留めて、本学を去ることに致します。長い間、ご静聴有難どうございました。

（本稿は、平成五年一月二十五日の講演記録をもとに先生に加筆していただいたものです。）